



近代文学作品論叢書 28

釈迢空  
『死者の書』作品論集成

Ⅱ

石内  
徹  
編

大空社

## 編者略歴

石内 徹（いしうち とおる）

昭和22年栃木県足利市に生まれる。

昭和44年國學院大學文学部文学科卒業。

現在、千葉県立千葉高等学校教諭。

著書／『ものぐさ小論文』（右文書院、昭和62年）

『近代の作家① 折口信夫』（日本図書センター、平成3年）

『釈迢空「月しろの旗」注考』（折口信夫研究会、平成6年）

編書／『人物書誌大系20 折口信夫』（日外アソシエーツ、昭和63年）

『人物書誌大系23 神西清』（同上、平成3年）

『自筆原稿 芹川行幸』（折口信夫研究会、平成元年）

『神西清蔵書目録』（日本図書センター、平成5年）

『折口信夫研究資料集成（全11巻・別巻1）』（大空社、平成6年） 他

現住所／〒299-44 千葉県長生郡睦沢町上市場320-74

## 近代文学作品論叢書 28 （全3巻） 釈迢空『死者の書』作品論集成Ⅱ

定価三九、〇〇〇円

（本体三七、八六四円）

一九九五年三月二十二日 発行

編者 石内 徹

発行者 相川 仁 童

発行者 株式会社 大空社

東京都北区赤羽二―三六―一二

電話〇三（三九〇二）二七三―

振替〇〇一六〇―九―一四〇八八二

郵便番号一一一五

印刷製本 株式会社フリオール

釈迢空『死者の書』作品論集成 目次

|             |                                   |
|-------------|-----------------------------------|
| 昭和49年(1974) |                                   |
| 川村二郎        | 解説……………5                          |
| 篠田一士        | この珍貴の感覚(下)——詩から小説へ……………14         |
| 野崎守英        | 彼方なるものとしての光——折口信夫『死者の書』……………31    |
| 昭和50年(1975) |                                   |
| 大岡昇平        | 折口学と文学……………47                     |
| 笠原伸夫        | 逆光の近代・『死者の書』をめぐる〈講座詩学への招待〉……………65 |
| 川村二郎        | 『死者の書』再説——文学の根への問い 10……………82      |
| 昭和51年(1976) |                                   |
| 佐藤えみ子       | 『死者の書』——試論……………97                 |
| 森 磐根        | 折口信夫『死者の書』論——日本文学の本質……………106      |

|             |       |                                  |     |
|-------------|-------|----------------------------------|-----|
| 昭和52年（1977） | 天沢退二郎 | 『死者の書』あるいは二つの〈作品〉                | 123 |
|             | 井口樹生  | 『死者の書』論                          | 128 |
|             | 饗庭孝男  | 悲劇の精神——折口信夫『死者の書』——              | 132 |
| 昭和53年（1978） | 大室幹雄  | 二人のポエタ・ドクトゥス——『指輪物語』と『死者の書』の世界—— | 153 |
|             | 笠原伸夫  | 『死者の書』の方法                        | 166 |
|             | 笠原伸夫  | 結 現代の幽暗部へ                        | 182 |
|             | 村松定孝  | 『死者の書』と泉鏡花〈折口学と私Ⅳ〉               | 188 |
|             | 阿部正路  | 折口信夫の「前世生替」始末                    | 193 |
| 昭和54年（1979） | 藤井貞和  | 『死者の書』                           | 207 |
|             | 東郷克美  | 死者の書——他界への恐怖と憧憬——                | 210 |
| 昭和55年（1980） | 吉益 譲  | 「折口信夫の『死者の書』について」                | 237 |
|             | 中村 浩  | 『死者の書』地名考                        | 245 |

昭和57年（1982）

梶木 剛 『死者の書』／釈迦空の世界Ⅱ ..... 255

昭和58年（1983）

中村 浩 二上山と大津皇子と ..... 285

江藤 淳 女の旅立へ女の記号学（3） ..... 289

昭和59年（1984）

長谷川政春 史論・小説・語り手——『死者の書』論のための序章—— ..... 295

竹内清己 迦空と辰雄にみる鎮魂——近代日本文学における生と死（1）—— ..... 319

高橋広満 「死者の書」論——をち水求めと、をち水つかい—— ..... 331

高梨一美 「死者の書」の主題 ..... 359

中農晶三 折口信夫の『死者の書』——大津皇子と中将姫へのレクイエム—— ..... 381

## 第1巻 目次

## 『死者の書』研究小史

石内 徹 1

## 釈迢空『死者の書』作品論研究文献目録

石内 徹 編 19

## 釈迢空『死者の書』作品論 I

昭和14年(1939)

白居雅雄 釈迢空の「死者の書」…………… 47

室生犀星 徹する処なし 諸家の諸作品を通読して

〈文芸時評(5)〉…………… 48

昭和18年(1943)

堀 辰雄 大和路信濃路「死者の書」

——古都における、初夏の夕ぐれの話——…………… 51

昭和19年(1944)

芳賀 檀 「死者の書」と歴史…………… 59

昭和21年(1946)

山本健吉 美しき鎮魂歌——『死者の書』を讀みて——…………… 65

昭和23年(1948)

吉田健一 小説論 平野謙『島崎藤村』福田恆存『作家の態度』

釈迢空『死者の書』…………… 85

昭和28年(1953)

神西 清 不思議な永遠の若さ 鎮魂歌「死者の書」の一曲…………… 93

加藤道夫 「死者の書」と共に…………… 94

昭和29年(1954)

坂本徳松 「死者の書」の向日性…………… 99

藤井貞文 きさらぎの雪——「死者の書」解説——其一…………… 111

昭和34年(1959)

江藤 淳 小説の文体…………… 121

昭和36年(1961)

白田甚五郎 古国のいざなひ——「口ぶえ」と「死者の書」——…………… 133

益田勝実 「日輪」と「死者の書」の間…………… 140

川村二郎 『死者の書』について…………… 149

昭和37年(1962)

山本健吉 当麻から巢山へ…………… 163

|              |      |                      |     |
|--------------|------|----------------------|-----|
| 昭和38年 (1963) | 小谷 恒 | 「詩集・小説」案内            | 179 |
| 昭和39年 (1964) | 高安周吉 | 「死者の書」について (一)       | 189 |
|              | 高安周吉 | 死者の書について (二)         | 192 |
| 昭和40年 (1965) | 高安周吉 | 死者の書について 三           | 197 |
|              | 高安周吉 | 死者の書について (四)         | 200 |
|              | 高安周吉 | 死者の書について (五)         | 203 |
|              | 高安周吉 | 死者の書雑俎               | 206 |
|              | 高安周吉 | 死者の書について 六           | 208 |
|              | 高安周吉 | 死者の書について 七           | 212 |
|              | 高安周吉 | 死者の書について (八)         | 215 |
|              | 高安周吉 | 死者の書について 九           | 217 |
|              | 加藤守雄 | 「死者の書」のあとさき          | 220 |
|              | 岡野弘彦 | 折口学の髓「死者の書」          | 224 |
|              | 高安周吉 | 民俗に示された日本人の知恵        | 224 |
|              | 高安周吉 | 死者の書雑俎 (十一)          | 239 |
| 昭和42年 (1967) | 加藤守雄 | わが師 折口信夫 (第二部)       | 245 |
|              | 森 豊  | 「死者の書」と「山姥」〈芸林逍遙・II〉 | 261 |

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 伊馬春部／中野重治／加藤守雄／小谷 恒／岡野弘彦    | 266 |
| 詩人釈道空〈座談会 全集にそって〉           | 272 |
| 加藤守雄／川村二郎／小谷 恒／岡野弘彦         | 272 |
| 『死者の書』をめぐって〈座談会 全集にそって〉     | 272 |
| 昭和43年（1968）                 |     |
| 奈良橋善司 折口信夫論——死語（一）——        | 281 |
| 昭和44年（1969）                 |     |
| 奈良橋善司 小説「死者の書」の話            | 289 |
| 昭和45年（1970）                 |     |
| 堀内民一 釈道空研究序説 『死者の書』の地霊感覚    | 297 |
| 昭和47年（1972）                 |     |
| 岩田 正 『死者の書』をめぐって／死者は甦るか     | 319 |
| 北野愛美子 『死者の書』をよんで            | 343 |
| 昭和48年（1973）                 |     |
| 阿部正路 釈道空Ⅱ 折口信夫の浪漫           | 357 |
| 佐々木重治郎 折口信夫・文学における根源力       | 362 |
| 太田代志朗 遥かなる神々の詞章——折口信夫断想     | 372 |
| 高橋英夫 物語のアイデア——「もののあはれ」と現代—— | 380 |
| 本多秋五 『死者の書』メモ（一頁時評）         | 387 |

目次

|                    |                            |     |
|--------------------|----------------------------|-----|
| 佐伯彰一               | 『死者の書』のディレンマ——日本の「私」を求めてIX | 388 |
| 馬場あき子              | 『死者の書』の世界にふれて              | 402 |
| 水木直箭               | 随筆『死者の書』                   | 412 |
| 第Ⅲ巻 目次             |                            |     |
| 釈迢空『死者の書』作品論 Ⅲ     |                            |     |
| 昭和60年(1985)        | 豊饒なる闇——『万葉集』、『金枝篇』         |     |
| 大谷和子               | 折口信夫『死者の書』をめぐる             | 5   |
| 石内 徹               | 堀辰雄の折口信夫受容——民俗学を視座として——    | 11  |
| 川村 湊               | 声の幻——言霊と折口信夫               | 22  |
| 加藤守雄               | 性の視野から                     | 35  |
| 昭和61年(1986)        |                            |     |
| 阿久根聡美              | 『死者の書』——復活に見える鎮魂の意義        | 51  |
| 小野左和子              | 『死者の書』の視覚的問題について           | 62  |
| 石内 徹               | 文芸思潮のドグマ                   | 68  |
| 昭和62年(1987)        |                            |     |
| 川村二郎               | 二上山と『死者の書』                 | 75  |
| 塚本邦雄               | 『死者の書』                     | 81  |
| 平成元年(1989)         |                            |     |
| 原山喜亥               | 折口信夫『死者の書』                 |     |
| 岡谷公二               | ——著者自筆原稿と訂正原本に基づく訂正表——     | 87  |
| 「口ぶえ」から「死者の書」へ     |                            | 93  |
| 高橋広満               | 天平宝字四年——『死者の書』の時——         | 118 |
| 平成3年(1991)         |                            |     |
| 夏石番矢               | 落日のカタルシス                   |     |
| 石内 徹               | ——折口信夫『死者の書』の重層性——         | 123 |
| 死と再生               |                            | 162 |
| 吉田達志               | 黒衣の神——折口信夫『死者の書』の世界——      | 174 |
| 結城 文               | 「魂乞い曼陀羅」上——折口信夫『死者の書』論——   | 201 |
| 結城 文               | 「魂乞い曼陀羅」下——折口信夫『死者の書』論——   | 205 |
| 平成4年(1992)         |                            |     |
| 持田叙子               | 享楽主義者の系譜                   |     |
| ——ひとつの『死者の書』論として—— |                            | 211 |
| 長谷川政春              | 重層する声——『死者の書』の語りと構造——      | 225 |
| 森安理文               | 『死者の書』論                    | 260 |
| 石内 徹               | 折口信夫にとっての神話伝説              | 284 |
| 村井 紀               | 『死者の書』について                 | 288 |

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 平成5年(1993)                 |     |
| 石内 徹 『死者の書』攷——大津皇子を視点として—— | 299 |
| 石内 徹 エジプトの『死者之書』と『死者の書』    | 309 |
| 平成6年(1994)                 |     |
| 松浦寿輝 神の登音                  | 317 |
| あとがき                       | 323 |
| 石内 徹                       |     |

釈迢空『死者の書』作品論Ⅱ

石内 徹 編

## 凡例

- 一、本書は、釈迢空の『死者の書』論についての主要な研究文献を複製収録した。短いものでも重要と思われるものは収録した。
- 二、『死者の書』の作品論以外でも、研究上欠かせない本文研究などの文献は収録した。
- 三、底本は、原則として初出誌（紙）・初刊本によった。底本表示は、文献の最初の頁に、著者・表題・出典・発行年月・発行元の順で掲げた。
- 四、文献の配列は、発行年月日順とした。
- 五、文献は、昭和一四年（1939年）から平成六年（1994年）末までに発表されたものを収録した。

昭和49年（1974）



川村二郎

解説

折口信夫『死者の書』(中公文庫A28)

昭和49年5月10日

中央公論社

## 解説

川村二郎

『死者の書』は、明治以後の日本近代小説の、最高の成果である。

こう書くと、いかにも独断的、主観的、恣意的な断言にきこえるだろう。ぼくとしても、せめて、「最高の成果の一つ」ぐらいに譲歩すべきか、という気持がなくてはならない。にもかかわらずあえてこのままにしておくのは、とりわけ今日、現代小説のあり方とか方向とかを考えようとする時、この作品ほど過去の重さと豊かさをそなえながら同時に未来を指し示している小説は、ほかに見当たらないと思うからである。そういう、いわばアクチュアルな意味において、これは近代最高の小説、模範的な小説である。つまり単なる記念物、文化財といった意味での名作、傑作、「古典」ではない、ということである。

195 解説

明治以後の近代小説が、ヨーロッパ小説を典範とし、たえずその影響を受けそこから学びながら、自己の道を模索してきたことは、改めていうまでもない。そこでかずかずの記憶するに足る作品が生れたことも、今さらふり返る必要もない、文学史の公認事項に属するといっていだらう。ただ、影響を受け、学習し摂取する道は、必ずしも平坦な大道ではなく、むしろ歩みを難渋させる九十九折の、成功よりも試行錯誤の方が目立つ道だった。見方によっては、死屍累々、と

いった感じさえあるかもしれない。先方の意匠のみをなぞって、孔雀の羽根を装った鴉のような不体裁をさらけだすもの、一時の流行を不易の本質と取り違え、単なる流行に一途に熱狂し、心酔し、殉じて悔いもないもの、あるいは、所詮誤解するしか手はないのだと居直って、なかば自棄気味な軽薄さと厚顔さで、手本を歪め、もじるもの。硯友社文学から自然主義へ、自然主義リアリズムから私小説へ、という道筋が近代小説の主流だとすれば、そこには常に、このような、意識的無意識的な誤解と歪曲の試みがつきまといっていたし、主流に対立する、より高雅な教養の持主たちの文学にしても、ヨーロッパ文学への彼らの造詣にもかかわらず、彼らが真に異質の文学世界からの呼び声を受けとめ、それにふさわしい答えを与えたかどうかは、疑わしいといわざるを得ない。

しかしそれでは、ヨーロッパ文学の本質とは何か、真のヨーロッパとは何か。無遠慮な裁断口調を承知であえていえば、それは弁証法である。相反するものを一つに結ぶ原理である。キリスト教がわからなくてはヨーロッパ精神はわからない、とよくいわれる。ぼくは教義についての知識を得ることや、いわんや信仰に入ることが、ヨーロッパを知るための必須条件とは少しも思わないけれども、キリスト教という宗教の成立と成長が、弁証法の勝利にひとしいことを理解する必要があると思う。超越と現実、運命と自由意志、精神と肉体、そういった二元論的対立が、克服したい断絶の相を示しているという認識、それにもかかわらずこの二元の対立が、何らかの媒介、仲保者の契機によって超えられねばならぬ、超えられるはずだとする確信。この認識と確